（別紙4）　　平成　24　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	4072200423		
法人名	有限会社　ツーウェイ・ヒューマニゼーション		
事業所名	グループホーム　和笑		
所在地	〒838-0002　福岡県朝倉市長谷山３９３－１０　　TEL 0946-25-0377		
自己評価作成日	平成２４年１１月２０日	評価結果確定日	平成２４年１２月２８日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人　北九州シーダブル協会
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5－27　　TEL　093-582-0294
訪問調査日	平成　24年12月03日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

知り得た入居者の個人情報に関しては、流出に留意しつつも、個人ケアの向上の為に職員間での共有を心掛け、一人ひとりの入居者に合った寄り添ったケアができるよう努めている

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

「和笑」は、秋月城近くの眼鏡橋が散歩コースで、自然に囲まれた住宅地の中に、ディサービス、宅老所併設のグループホームである。利用者と職員は、蛍が飛び交う川の清掃や、敬老会に参加し、三味線演奏や中学生のボランティアを受入れ、開設9年を迎え、少しずつ地域交流が始まっている。かかりつけ医による月2回の往診は、介護職員と併設事業所の看護師との連携で、充実した医療連携が図られ、利用者の健康管理は充実し、家族の評価は高いものがある。また、非常災害に供えて、消防署の協力体制や、運営推進会議に消防団員の参加があり、代表の自宅がホーム前にあるため、いざという時の救援体制は万全のものがある。今後は、重度化が進む利用者が、いつまでもホームで暮らし続けるために、職員間で連携を図り、チーム介護を目指すグループホーム「和笑」である。

Ｖ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：25.26.27）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：20.40）		1. 毎日ある
		○	2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：40）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：38.39）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：51）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：32.33）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
64	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：30）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,21）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,22）		1. ほぼ毎日のように
		○	2. 数日に1回程度
			3. たまに
			4. ほとんどない
67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
68	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）		1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
		○	3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
		○	2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)＋(Enterキー)です。〕

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	数年前理解しやすいよう、又唱和しやすいよう以前のものから作り直し、申し送り時に唱和していたが、現在はそこまでしていない	「和みの中で笑みに包まれゆったりと楽しく・残された力で暮らしの喜びと自信を・地域の方と仲良く楽しく」という独自の理念を掲げ、理念にそった介護サービスを目指している。新人職員は、仕事に入る前に唱和してもらっているが、初心に戻るためにも、職員全員で唱和する事を検討している。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	挨拶程度が主でそれ以上の交流はなかなかないできないでいる ただ行事等連絡は受けているので積極的に参加したい	地区の敬老会や川の清掃活動に参加したり、津軽三味線の慰問もあり、又、夏休みには9人の中学生が3日間介護の体験ボランティアに訪れる等、交流が始まっている。自治会には入っていないが、地区の行事連絡を受け、積極的な参加を目指している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在は認知症サポーターの手伝いを通してだけである		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は特に避難訓練のことについて尋ねたり助言をいただいたりしているが、活かせていない点が多いと反省している できることを少しずつしている	会議は、家族や地域代表、民生委員、元消防団員、行政職員等の参加で、2ヶ月毎に定期開催し、地域との交流のあり方や避難時の問題点について活発な意見交換が行なわれている。実際、会議の中で提案のあった、地域に火災を知らせるために非常用ブザーを取り付ける等、出された意見は出来る事から少しずつホーム運営に反映させている。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	密に取り…のように積極的には出来ていない	行政担当窓口に困難事例や疑問点等相談し、アドバイス等もらっている。また、運営推進会議に行政職員が参加し、ホームの現状や取り組み、課題等を理解してもらい、少しずつ連携が始まっている。また、行政担当窓口に出向いた際、隣の包括支援センターに立ち寄り、話しをする事を心がけ、少しずつ関係作りに取り組んでいる。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	正しく理解しており見守りや近接介助を心がけ、拘束は行っていない	管理者は、身体拘束廃止マニュアルを用意し、職員に説明し理解してもらい、拘束の弊害を考慮しながら、利用者が安心して暮らせる介護サービスを目指している。特に言葉による抑制に気を付け、職員間で話し合い、見守り合って拘束のないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	入浴中の身体観察を含め、行動・言葉による場合でも見過ごすことのないよう努めている		

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	6	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	セミナー等に参加し、それを活用するよう努めている	権利擁護に関するセミナーに参加し、職員が理解した上で、入居時に利用者や家族に説明し、制度の理解を得ている。利用者や家族が制度を必要とする時、活用するための支援や関係機関に紹介できる体制を整えている。包括支援センターを紹介した事例もあったが、経費、時間が掛かる事等から実際の活用にはなかなか繋がっていない。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解･納得を図っている	読み合せを実施し、質問しやすい雰囲気を心がけている		
10	7	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族からの意見を頂いたときは、職員間で申し送りにて共有し、又職員会で検討している	ホーム便りや、家族の面会時に利用者の健康状態や暮らしぶりを報告し、「何かないですか、何でも言ってください」と常に声をかけ、意見や要望を聴き取る努力をしている。また、家族の思いの汲み取りと、家族同士の交流の大切な機会として、クリスマス会や新年会を兼ねた家族会を年1回開催している。	
11	8	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	機会が少ない	職員会議は毎月25日に定期開催し、カンファレンスや行事計画等を話し合い、活発な意見が出され、充実した会議である。管理者は、職員が意見を出しやすい雰囲気を心がけ、出された意見は出来るだけホーム運営に反映させる努力をしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境･条件の整備に努めている	いろいろと検討し実践へと反映しているところもあるが、もっと努めて欲しい		
13	9	○人権尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集･採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても,その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	採用等に関しては差別はないが実務に関してはもっと評価できるようであればいいと思う	職員の採用は、年齢、性別の制限はなく、人柄や優しい性格の方を優先している。事務所の中にロッカーを設置し、希望休などにも配慮し、職員が料理やレクレーション、工作等の特技を活かしながら生き生きと仕事が出来るよう環境整備に努めている。近日中に職員間の交流、親睦を図るため、併設事業所との合同食事会を開催する予定である。	
14	10	○人権教育･啓発活動 法人代表及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	職員会などで口頭で話し合う	外部の人権研修で学んだ事を会議で報告し、全職員に意識付けを行い、利用者の人権を尊重する介護サービスの実践に向けて取り組んでいる。また、利用者の尊厳を守る事を謳ったホーム理念を確認する事で人権教育啓発活動に結びつけ、実践に繋げている。	

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部での研修は必ず参加できるが2ヶ月に1回くらいのセミナーであり、もっと近くで機会があればいいと思う		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	部会が年に4回あり、その時に互いの職員が集うが交流の場とはなっていないと思う		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族に聞きとりをしたり、本人の表情（声）や状態を見て対応している 不安を与えないよう傾聴している		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	小さな事でも聞きとり、又報告等を通じて信頼関係が築けるよう努めている		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	最も必要と思われる支援に努めているが、他のサービス利用は行っていない		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事等出来ることは手伝ってもらう 肩のもみ合いをする等、同じ立場での状況も得ている		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族に出来ることは協力してもらう等、本人第一に考え行っている		

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	11	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族と関わる支援のみになっている	職員は利用者に寄り添い、話を聴きながら、利用者の自宅周辺をドライブしたり、馴染みの理･美容院の利用や商店での買い物等、馴染みの人や場との関係が継続出来るよう支援をしている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の声かけや、お互いに助け合う事が出来るよう配慮している		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人･家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	電話等かけて、不定期に近況の報告を受けたり、尋ねたりをする		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	12	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者の発語や行動、又は家族からの情報で把握を努めている	勤務年数の長い職員、入居年数の長い利用者が多く、馴染みの関係の中で、言葉だけでなく表情や仕草等から、思いや意向を把握している。また、職員間でサービスの差が生じないように、把握出来た事を共有するための努力をしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の聞きとり（施設や病院）や、家族からの聞きとりを行っている		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員間での申し送りや報告にて把握している		
28	13	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月、職員会で話し合うが、本人との話し合いは難しい 家族とは面会時にさり気なく希望を問いかけ、作成している	介護計画は、利用者と家族の希望を聴き取り、主治医や関係者と話し合い、3ヶ月毎に作成している。利用者の重度化が進む中で、家族と連携を図り、方針を共有し、その都度見直しを行っている。	

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践･結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、ケアや状態の記録、申し送りを行い活かしている		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その日によって状態も違うことがあり、その時に出来る対応をとっている		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	あまり出来ていない		
32	14	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	毎日のバイタルチェックや定期往診、あるいは緊急往診などより支援している	入居時に提携医療機関への変更を行う際、利用者、家族とホーム提携医が話し合う機会を設け、利用者、家族の要望や提携医の方針等を確認している。また、提携医療機関による2週間毎の往診や24時間の医療連携体制を確立し、利用者が安心して適切な医療が受けられるよう支援している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	小さな異常でも報告し、指示を受けている		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院の必要性に応じ、かかりつけ医に相談、本人･家族の最善に努める		
35	15	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人･家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族の希望に出来るだけ沿い、終末期の方を受け入れても、苦痛の度合いによりケアの限界を感じるときもある	利用者、家族の希望を聴きながら、出来るだけ希望に沿うよう終末期に向けての取り組みを行っている。利用者の重度化が進む中で職員の負担も増え、サービスの質を低下させずに重度化の利用者をケアするためには、どうしたらいいのか職員間で検討を重ね、利用者一人ひとりに合わせた重度化に向けた介護体制を目指している。	ターミナルケアの指針を作成し、出来る事、出来ない事を説明した上で、利用者や家族に承諾をもらい、方針を共有し、利用者一人ひとりに合わせた介護支援体制を確立していく事が望まれる。

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	行っていない		
37	16	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は実施している	消防署の協力を得て、年1回避難訓練を実施している。自主防災組織による昼夜を想定した避難訓練も随時行い、併設施設との連携を確認し、結果を持ち寄り、その都度改善しながら、利用者が安全に避難出来る体制を目指している。近日中に、地域に協力を呼びかけ、ホームの表に設置した非常ベルを鳴らす訓練を予定している。また、非常食の乾パンと飲料水の用意がある。	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	17	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	傾聴しつつも、冗談でなれなれしく言うこともあるが、人生の先輩として尊敬する姿勢を忘れないようにしている	利用者のプライバシーを尊重するため、会議の中で話し合い、利用者の尊厳を守り、プライドや羞恥心を傷つけない取り組みを実践している。また、個人情報の記録の保管や職員の守秘義務についても、徹底されている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ促すよう努めている		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	散歩を希望する方には付き添い、又外に行きたい人にも付き添い…という形で出来るだけ希望に添えるよう努めている		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	おしゃれは出来ていないと思われるが、出来るだけきちんと身だしなみになるよう支援している		
42	18	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	出来ることが少なくなっているが、芋の皮むき、つぎ分けなどできることはお願いしている	お昼が近づくと、台所から小気味良い包丁の音が聞こえ、煮物の匂いが漂よう家庭的な雰囲気である。季節の野菜、果物を取り入れ、担当職員が利用者の好みを考えながら、献立を立て買い物に行き、調理した心のこもった美味しい食事を、「美味しいね」と声をかけ合いながら利用者と職員が同じテーブルで食べ、笑いがいっぱいの楽しい食事風景である。	

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分摂取がなかなか出来ていない方には、声かけや小刻みな水分補給等摂取するよう努めている		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、利用者さんに合った口腔ケアを行っている		
45	19	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	随時、定時の排泄誘導を行っている	排泄チェック表をもとに、利用者一人ひとりの排泄パターンを把握し、早めの声かけや誘導を行い、出来るだけトイレでの排泄の支援をしている。夜間に関しては、誘導する方、声をかけても目が覚めない方は睡眠を優先してパット交換で対応する等、利用者一人ひとりに合った支援をしている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取の声かけに努め、又体操や散歩の誘いを実践し、それでも必要な場合に限り、下剤を使用している		
47	20	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	拒否があれば、時間や曜日をずらしたり、希望があれば毎日でも入浴を行っている	入浴は一日おきであるが、入浴好きの利用者は毎日入浴している。入浴を拒否する方には、時間をずらしたり、声かけを工夫したりしながら、無理強いはせずに清拭等で対応する事もある。脱衣所にエアコンを置いたり、大きな洗面器で足を温めながら体を洗う等の配慮をし、菖蒲や柚子を入れて季節を感じてもらう等、入浴が楽しくなるような支援をしている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	必要な方へは、昼食後の臥床の声かけもしている		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	吐き出しなどの予防の為、完全に飲み込まれるまで見守りを行う 複数の職員で確認し、誤嚥防止に努めている		

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	認知度や介護度の違いもあり、一部の利用者の見守りに片寄り、全てに声かけが出来ない状況もある		
51	21	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	体力低下やその日の職員の人数などで、外出できていないときもある	利用者の重度化に伴い、全員揃っての外出は年々困難になっているが、自然に囲まれたホーム周辺を少人数で散歩したり、買い物、外食、花見、ドライブ等、近場での外出を行い、利用者が少しでも戸外で自然を感じる事が出来るよう支援している。また、家族来訪時に散歩の同行をお願いする等、家族の協力を得ながら外出支援を行っている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	可能な方には所持や使用してもらうなど、一人ひとりに合った対応をしている		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙やはがきを受けた後、お礼を含め電話にて伝えたりしている		
54	22	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	努めている	眼鏡橋の近くの清流沿いの自然に恵まれた住宅地の中にあり、布団が干された玄関前のスロープを通って玄関に入ると、温かみのある季節の飾り物や絵、行事の時の楽しそうな写真が掲示され、家庭的な雰囲気である。ソファーの間を開けて車椅子に配慮した移動スペースを確保しながらも、利用者が暮らす空間として落ち着いた雰囲気を心がけ、一日の大半を過ごす利用者にとって、居心地の良い共用空間となっている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有のソファーでの位置が固定化してきて、テレビの見やすい場所などが独占されるなど、全ての方が“満足”とは言えないが、玄関や外にベンチを置いて、ひなたぼっこをしたりなど工夫している		
56	23	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた物を持ち込んでもらっている	居室は、利用者の希望と家族の協力で使い慣れた馴染みの家具や大切な物等を持ち込んでもらい、本人が落ち着くスペース作りを心がけている。また、利用者の重度化が進み、家族の協力を得ながら、居室における重度化対策も始まっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	タンス類が倒れたりしないよう、高さの低い物をお願いしている 生活に必要な物が適切に配置されるよう努めている		